

東亜同文書院記念センターの発足に寄せて

愛知大学の建学精神の再構築

前愛知大学学事担当課長 大野 一石

一、愛知大学と東亜同文書院の再認識

愛知大学の創設と東亜同文書院大学の関係は、創設当時において、必ずしも良好ではなかった。後述するように問題があったのである。最近になって東亜同文書院について、筆者が強い関心を抱くようになったのは、東西の冷戦構造が崩壊するとともにイデオロギー対立時代が終焉した歴史的背景からである。そこで愛知大学の「生みの親的存在」の「東亜同文書院大学の存在意義」と愛知大学の関係を認識することがU・I（ユニバーシティ・アイデンティティ）からみて必要だと感じた。

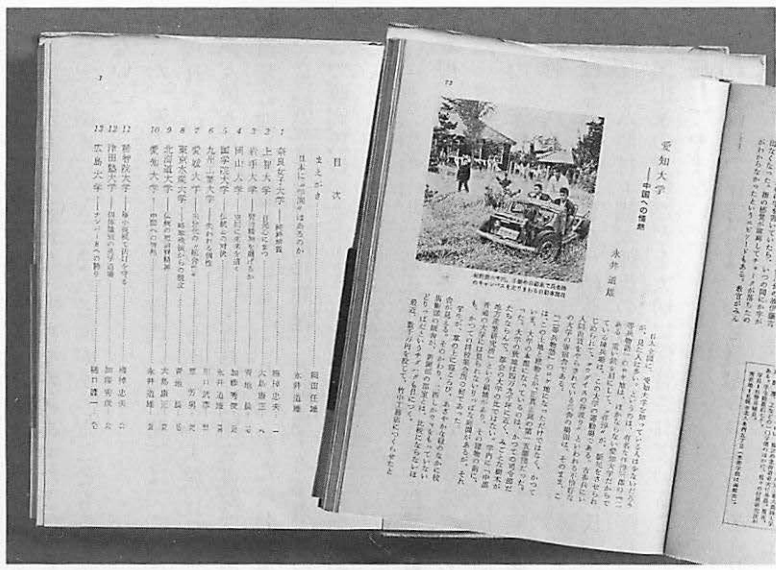
具体的には、東亜同文書院の初代院長の「根津院長

六四回忌」に参列（一九九〇・四・一五）したのを機に、靖亜神社の村上祭主との出会（一九九〇・四・二二）、白城大内暢三翁顕彰碑（風呂水の哲学）除幕式へ参列（一九九〇・五・二七）および東亜同文書院大学史（一九九〇・五・二四、滬友会総会）の入手が契機になっている。そして、私が靖亜神社の春季大祭に参加した結果、愛大創設の動機・経緯と同文書院との事実関係が部分的ではあるが確認できた。とりわけ本間喜一先生などによる創設当時の苦衷・苦悩の片鱗が伺えた。

本間先生の同文書院院長としての責任感については、岩田冷鉄氏が「同文書院の学燈を点し続けた異色の教育家・本間喜一先生」と業績を賛えた追悼文のなかで、同文書院と愛知大学の関係について訴えた箇所を引用して

おく。

「霞山会の前身近衛篤磨を初代会長とする東亜同文会は、同文書院の東京における本部であつて、書院と表裏一体機能を發揮した。換言すれば東亜同文会存在の意義は、生きた人間を作る同文書院と一体であるこ



写真：朝日ジャーナル編「大学の庭（上）」

とにあつた。

その意味でも、愛知大学と霞山会とは戦後解体財閥等の旧態回復同様、自動的に本来の關係に復帰すべきであつた。しかるに両者は、既に理事交換等關係を深めていくけれども、未だ完全には旧に戻らぬ憾がある。このままでは霞山会は社交クラブ、愛知大学は地方大学になることなしとしない。先人の偉業を護り育てる為にも両者の關係回復を急がねばならない。」

愛知大学の設立者故本間喜一先生の苦衷、苦惱は、「同文書院廃校、愛大創設」当時の回想（東亜同文書院同窓会の機関誌『滬友第四一號』昭和五三年）の中に伺い知る事ができる。敗戦という混乱をリアルに述べるこ

とが必要であるが、浅学非才の私では困難である。この東亜同文書院大学と愛知大学との關係を、永井道雄氏（元文部大臣）は朝日ジャーナル編集部編『大学の庭（上）』（弘文堂昭和三九年）で「愛知大学……中国への情熱」と題して愛知大学の創立の背後に同文書院が在つたことを次のように述べている。

「東亜同文書院は、明治三四年、近衛霞山公の主旨によつて上海に設立されたが、その歴史は、日本の对中国政策の歴史と同様に複雑であつた。西洋の識者のあいだには、同文書院を日本の大陸進出の知的拠点とみる見解が強いが、もちろん、歴史は、そのように単純なものでなかつた。孫文自らが記すところによると、中国の革命に参加した日本人は少なくないが、その一人、山田良政は、同文書院の初期の有力な指導者であつた。それ以後同文書院は、比較的、軍部に対し批

判的な立場を取ってきたが、それにしても、日本の大陸支配がおこなわれた、ただなかにあった大学として、歴史の齒車にまきこまれる面があったことも否定できない。」

また、滬友会会員の藤岡瑛氏（三三期）は、ここに述べられている山田良政をとりあげ、「大旅行誌雑感」（滬友第五八号）一九九〇年五月）で同文書院関係の文化遺産に関して論じている。これは、新たな問題提起（同文書院記念会館の創設問題）と関連する事項である。そこで藤岡氏は、次のように山田順造、村上武両氏が保管している資料を紹介している。

「三八期の山田順造氏が山田良政・純三郎両先輩の事歴を中心に家系誌的資料を編集されていることなどは、書院外史としては貴重な材料となろう。氏は同時に山田家所蔵の中国関係資料の永久保存の方策も考えておられる。その完成を望むのはご当人だけに限られてはなるまい。また、靖亜神社の祭主村上武氏が、ご尊父一八期村上徳太郎氏の遺志を継ぎ、根津院長はじめ頭山家の資料などを大切に保管されていることにも敬服してやまない。」

それら資料の保管には、公私協力のコミュニティ財団法人方式も考えられよう。（太字は筆者、以下同じ）

二、愛知大学の創立と東亜同文書院の関係

愛知大学の創設後は東亜同文書院の関係者とは、必ずしも意思疎通があったとは言えず、むしろ無関係である

との見解が強かった。これを、滬友会編「東亜同文書院大学史」で次のように述べている。

「戦後の一時期には、極めて疎遠になった時代があった。その原因については、旧大学史には「同文会清算の際の諒解事項により、同会の残余財産は、将来書院出身者が中核となって結成する後継団体に移譲される筈であったのに、清算人の恣意的な扱いで、財産の一部が寄附の形で愛知大学に持ち去られた（注）」ことにある旨が記述されている。このため、当時滬友会は、同大学と旧東亜同文書院大学との間に何らの連絡関係がない旨を、広く各方面に対し声明した。

（注）本件はすでに円満解決済みのことであるが、参考のため、元愛大教授鈴木擇郎（15）の説明を附記しておく（前掲座談会記録の要約）。

（1）同文会から第二封鎖預金（現金化後22万円）の寄附を受けたが、これは書院大学の残務整理を愛大に委嘱したためと思う。愛大ではこの金を特別会計として保管し、残務整理と書院同窓会関係のみに使用している。

（2）愛大設立の際、図書整備の必要のため、同文会から霞山文庫の図書を借用したが、後日（25年4月）同文会の後身である霞山会から買い受けた。

（3）書院大学の教授たちが作製した中国語辞典原稿カードの愛大帰属が問題にされたが、このカードは戦後書院大学が中国側に接収された時、文化財の一部として同時に接収されたもので、その後「改めて日本人に贈る」として日中友好協会（内山完造理事長）を

通じ、日本へ返されたものである。同協会では元の関係者である熊野正平（17）、野崎駿平（18）、坂本一郎（20）並びに鈴木擇郎（15）を招集し、カードの帰属について協議した結果、全員一致で愛大へ引き渡し、これを完成せしめることになったのである（この『中日大辞典』は昭和43年2月に完成出版、日本はもとより中国でも名著として賞讃され、愛知大学の名声を高からしめている）。

もともと、滬友会のこのような行動は、かえって愛知大学の設立にはプラスになったと、本間は次のように語っている（前掲両座談会記録の要約）。

愛大と書院とはまったく関係はないのだが、（前にも言ったように）、当初は書院の身替りだとして目をつけられていたから、書院の復活だとか、身替りだとかいえば、すぐに潰されることになる。だから、滬友会の方で、書院とは関係がないのだと盛んに言ってもらったのが役に立った。僕はかえってありがたいとさえ思っていた。

また、本間は、次のようにも語っている。

世間の人は、同文書院を背景に持つて居たからこそ、あれだけの愛知大学ができた、と思っっている。愛大の設立に当たっては、同文書院だからこそ、援助も応援もしてくれた。もし、同文書院と何も関係なしに大学を設立するとなれば、とてもできるものではなかったであろう。」

愛知大学と滬友会、霞山会と親密な関係をもつに至った経緯について、私は『滬友第五九号』（一九九一年五

月）に「同文書院と愛知大学の関係、愛知大学創設の背景と理念」を寄稿した。この稿との関連として「東亜同文書院記念基金」（約1億5千万円）の寄託および中国の辛亥革命に関係する孫文の資料「山田良政・純三郎兄弟遺品」の愛知大学寄贈（一九九二年一月）がある。幸いに「愛知大学東亜同文書院記念センター設立」が実現したことは、愛知大学にとっては画期的なことである。

三、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの設置

愛知大学と東亜同文書院の関連について、愛知県知事の諮問的会合の「あいちの文化懇話会」という集まりで、そのメンバーの上坂冬子さんが『中日新聞』（一九九三年四月三〇日）に寄稿し、最後のところで「他に追従するというんじゃなく、他の水準を無視して独自の水準を作り上げてしまうというような方向を目指した方が、文化の振興という点では近道なんじゃないでしょうか。その意味で、私はいま愛知大学の東亜同文書院センターにとても関心を持っています。」と述べている。このことは愛知大学に対し、東亜同文書院センター設置がもつ文化遺産の継承の意義と期待を述べているものである。

また、上海東亜同文書院大学第三四期生通訳従軍記『長江の水天をうち―江南に失われし刻を求めて』（興学社平成五年四月）の編集後記に、

「この冊子は戦争文学ではない、纏まったものでもない。当時志を共にした同期生の無心に語った従軍記が主体となっている。その中に書院精神を語り継ぐも

のがあるのではないかと信じている。「日中の提携なくしてアジアの平和はなく、アジアの平和なくして世界の平和はない」と言った孫文の信念は書院精神に通ずるものがある。

私たちは将来の日中の善隣関係の発展を願うものである。

書院創学九〇周年記念事業のひとつとして滬友会が発行した「滬城に時は流れて」に、私たちの従軍記を掲載してもらおうよう努力したが、余り膨大な原稿で全部を掲載できない。といって選択して代表作を載せるわけにもいかなないので、われわれ独自で発刊することになった。したがって「滬城に時は流れて」と重複して掲載されたものもあるのでご承知願いたい。また、従軍記の集大成として纏めようという意義をもたせるために、既刊の「嵐吹け吹け」「続嵐吹け吹け」に掲載されたものからも幾つか転載したものがあがるが、いちいちの断り書きはつけていない。(長島龍之助記)と述べ、さらに「滬城に時は流れて」のなかに山本正三「戦果雄一羽」に愛知大学への希望を次のように述べている。

「ただ、思うに日中戦争の日本側の主要な原因は、軍の幹部が西欧近代兵学の優等生であったとしても、彼らがその先輩でもある根津先生の教えを学んでいなかったところにあると私は思う。この判断は非常に短絡的ではあるかもしれないが、もし、21カ条条約に断固反対された先生の教えを学んでいたら、歴史の流れは別の展開をしたのではなからうか。根津精神を建学の

原点として創設された東亜同文書院の残り火も、いままさに消えんとしている。誠に残念というほかない。後事を託するとすれば、その建学の経緯から見ても愛知大学をおいてほかにないと思われるが、愛大の学生諸君、果たしてその根津精神を継承してもらえらるうか。」

愛知大学東亜同文書院記念センターの発足によって、愛知大学がそのセンターをとおして文化遺産の継承から、大学の個性化につながるよう期待をよせている。

四、占領下での愛大創設期の苦悩

愛知大学の創設期に、上海にあった東亜同文書院の卒業生である故神谷竜男初代図書館長は、引揚学生などを受け入れる候補地に昭和二年三月豊橋市にした矢先、進駐軍から呼出しをうけた。その状況を「愛知大学創設前後」(愛知大学通信第一号)昭和五年(二月)で述べている。

「候補地についての運動をしている途上、名古屋駐屯の進駐軍情報部の知るところとなり、五月上旬頃だったと思うが、突然、大浜警察署を通じ進駐軍からの出頭命令を受けて驚いた。その頃、日本は占領管理下で、進駐軍は絶対的で、日本政府の上位に位していた。命令書の日と時間を間違えないようにして、広小路の納屋橋附近にあったと思うが、進駐軍のカマボコ兵舎を訪ねた。最初は家族のことなどから調べられ、以後、一週間に一回の割で、計六、七回に及ぶ、のべ一か月

余に亘る取り調べを受けた。その間、東亜同文書院のことも及んだ。同文書院が昭和七年（一九三二年）の上海事変の際、時の大内暢三院長によって、あの情勢の上海から、事変勃発後、直ぐ、学生全員を含む日本内地（長崎）への引き揚げを敢行した件を話した。そのことは、当時の長崎の新聞に出ている筈だ。」

このような東亜同文書院の精神（反軍的行為）が、愛知大学創設と占領軍との交渉において無関係ではなかった。これらのことが昨今の東亜同文書院の再評価につながり、その人脈（荒尾・根津・近衛→大内↓本間・小岩井・神谷）としての流れがある。その精神が「世界平和への教育が果たす役割」として、愛知大学の建学理念につながっており、併せて、愛知大学と中国の關係に研究・教育的な配慮が求められている。

これらの関連から創設者本間喜一の愛大創設期の苦悩談を次に「東亜同文書院大学史」から転載しておく。

「愛知大学は、翌二二年一月から予科を、四月から法経学部を開設したが、この開校に対しては、当初進駐軍側から「スパイ学校同文書院」の復活として強い圧迫があった。当時の模様を後年本間は主要次のごとく語っている（『滬友第二二号』所載「終戦前後の書院大学を語る座談会記録」および『滬友第四一號』所載座談会「書院廃校・愛大創立当時の回想」より）

二二年三月、突然名古屋軍政部、東海・北陸軍政部、京都軍政部の将校数名が、愛大を同文書院の復活と思ひ、書院のことをいろいろと調査にやってくる。「同文書院は国費でやっていた。それには何か義務があつ

昭和51年12月1日

愛知大学創設前後(二)

昭和五年、愛知大学が創立された。創立の経緯は、大内暢三院長の上海からの引き揚げと、その後の教育活動に由来する。創立の経緯は、大内暢三院長の上海からの引き揚げと、その後の教育活動に由来する。

創立の経緯は、大内暢三院長の上海からの引き揚げと、その後の教育活動に由来する。創立の経緯は、大内暢三院長の上海からの引き揚げと、その後の教育活動に由来する。

創立の経緯は、大内暢三院長の上海からの引き揚げと、その後の教育活動に由来する。創立の経緯は、大内暢三院長の上海からの引き揚げと、その後の教育活動に由来する。

創立の経緯は、大内暢三院長の上海からの引き揚げと、その後の教育活動に由来する。創立の経緯は、大内暢三院長の上海からの引き揚げと、その後の教育活動に由来する。



神谷 龍男
法経学部教授(兼任)

私の追憶

当時の記者

創立の経緯は、大内暢三院長の上海からの引き揚げと、その後の教育活動に由来する。創立の経緯は、大内暢三院長の上海からの引き揚げと、その後の教育活動に由来する。

創立の経緯は、大内暢三院長の上海からの引き揚げと、その後の教育活動に由来する。創立の経緯は、大内暢三院長の上海からの引き揚げと、その後の教育活動に由来する。

たろう」というのだ。つまりスパイ義務があったらうという意味だ。僕はエドガー・スノーの『レッドスター・オーバー・チャイナ』を読んでいた。あれは満州事変後に書かれたものだが、それには、「今度ハルビ

ンにできた「ハルピン学院」は、上海の「東亜同文書院」と同じだ。同文書院は数年間スパイ術を教え、それを官庁や会社などに直属し、ある者はネイティブのなかにとけこんで、終生スパイを忘れない」と書いている。これが彼ら米国人の常識なんだ。また中国側も神経質になっていて、二一年一月に愛大の設立が認可になった二週間ぐらい後に、上海の大公報は、豊橋で同文書院が愛知大学として復活したと書いていた。

僕は「そんなことはないんだ」といったが、いっかちな承知しない。どうせ学校を潰しに来たと思つたから、「日本政府は出資したら受益者に義務を負わせるような合理的な取り扱いはしていない。日本がアメリカのようにナショナルに事を運んでいたら、こんな馬鹿な戦争はしなかつたらうし、また戦争をしても負けはしなかつたらう」といつてやった。そしたら、「よし、わかつた」といい「同文書院の教授をこれ以上愛大へ入れてはいけない」という条件をつけて、愛大の存立を認めてくれた。しかし、このため小竹君や久重君を採用できなくなつた。

その後、僕は三べんぐらい名古屋のCICと呼ばれ「卒業生がパージになつている（注・昭和二年七月七日以降の書院卒業生は教職パージになつてた）のに、お前がパージにならないのはおかしい」という。

「士官学校や兵学校の卒業生はパージになつたが、教官は個人審査を受けてパージになつていない。われわれも文部省の個人審査を受けている」と、説明したら納得したが、教職員パージ規則を改正して、書院教授

のうち学長とか部長などの責任者はパージになつた。しかし、但し書きつきで、「既に資格を認可された者は、その学校に限りさしつかえなし」ということになつた。」

確かに愛大の創設準備に当たつて危惧を抱いた問題として、「同文書院が軍に協力したスパイ学校である」と誤り伝えられ、アメリカ占領軍（GHQ）もそのようにみていた。そのことが卒業生を学校から教職追放（パージ）にした。このことにより愛知大学の創設は無理ではないかと心配したことがあつた。この問題は愛知大学の創設と関連して本間、神谷先生が度々、GHQに呼び出されてきたが、この点は、戦後のアメリカの寛大な処理中国の寛容な対応が、愛知大学の創設にかかわつたのである。「東亜同文書院がスパイ学校」への反論を大城立裕（四四期、芥川賞受賞作家）は、

「同文書院にたいしてまったく局外にある人ならば、一言で「スパイの親玉」と片付けるだらう。ところが、私たちの場合はそうはいかない。このような行動のあとに「東亜同文書院」というものを構想した、その思想の成立を、できるだけ善意で（ということとは、今日からみて否定的な批判をしすぎないような線で）理解したい、という願望をすてきれない。「スパイの親玉」ということと「日支提携」ということが、矛盾することなく両立することを願うものだし、この「滬友」誌には、そのような理解に裏付けられた詩文が、毎号のように載せられている。

しかし、この両立には、いくつもの資料、論理のク

ッションが必要になってくる。それを心得ていないことが、悔しい。私の小説は、いわばその苦しみを吐露したようなものでもある。」

と「書院文化史の願い」(滬友第五七号)一九八八年一〇月)の稿で述べているが、最近になって同文書院の再評価が学会などで論じられている。

そこで、愛知大学と東亜同文書院の関係について、ユニバーシティ・アイデンティティの視点から「愛大と書院」との関係の文献を紹介するために私は「滬友第五九号」(一九九一年五月)に「同文書院と愛知大学の関係、愛知大学創設の背景と理念」を寄稿した。この機に「東亜同文書院記念基金」(一九九三年五月現在、約一億五千万円)の寄託および中国の辛亥革命に関係する孫文の資料「山田良政・純三郎兄弟遺品」の愛知大学寄贈(一九九二年一月)がされている。

愛知大学が二一世紀に向けて構想する場合に、建学の理念を再構築する必要性を強調したい。これは、愛知大学が東亜同文書院の文化遺産を継承し、愛知大学の建学の理念を再確認することが必要であろう。そして幸いにも「愛知大学東亜同文書院記念センター」の設置が実現したのである。

五、建学の精神の再構築への期待

大学審議会での主要な目標として大学の個性化が求められ、特に、私立大学にあつては国・公立大学との相違を明確にし、建学の精神とU・I(ユニバーシティ・ア

イデンティティ)が重要であるとされている。大学の組織としての一体性を高めるだけでなく、外から見たイメージをアピールし、教育の個性化、特色づくりのためにもそれは重要となっている。教員・職員・学生が一体となるシンボルが組織活性化のために不可欠である。立命館大学は、「学祖・西園寺公望」をアピールし、東洋大学は井上円了記念学術センターを設置し、それぞれのU・Iの要としている。

「私立大学は、その創設者の教育への情熱を基調としなくてはならない。」つまり大学運営の基本は創設理念によるのが一般的で、臨時教育審議会においても「建学の理念」を強調しながら、芭蕉の「不易流行」の論理を訴えている。芭蕉の「不易流行とは、不易は永遠に変わらないもの。流行はその時々々の新風のこと。この二体の風雅は誠から出るもので根本はひとつである。」この言葉は臨時教育審議会第二次答申の「第三節 未来から挑戦」における「(一)教育における不易と流行」の項にある(『文部時報』昭和六二年八月)臨教審答申総集編、九〇頁〜九二頁)。この考えを参考に、次のような期待が前提になろう。

愛知大学では、幸いにも「愛知大学東亜同文書院大学記念センター」の設置が滬友会と愛知大学の間で、まともまりつつあることは喜ばしい。あらためて大学創設の理念が問い直されると同時に、大学の発展は個性化への志向が基本となるからである。